



Title	音の民族誌 : モンゴル遊牧社会における人・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践
Author(s)	薩仁図雅
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16966号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99810
Type	doctoral thesis
File Information	Sarantuya_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： サリントヤ

学位論文題名

音の民族誌—モンゴル遊牧社会における人・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践—

本博士論文は、モンゴル遊牧社会における歌、かけ声、沈黙、風の響き、動物の鳴き声といった音の実践に着目し、それらが人間・動物・土地・精霊という多様な存在のあいだにどのような関係を生じ、世界を立ち上げるのかを民族誌的に明らかにするものである。本研究は、音を単なる情報伝達的手段や文化的表現としてではなく、人間と非人間的な存在が相互に応答しながら関係を形成する実践として捉え直すことを目的とする。

モンゴルの遊牧社会において、音は日常生活を支える重要な知覚様式の一つである。広大な草原環境では視覚的な手がかりが限られる一方で、風の向きや強さ、草の擦れる音、家畜の鳴き声や呼吸の変化といった微細な音の違いが環境の状態を知らせる手がかりとなる。牧民たちはこうした音を聴き取りながら放牧地の選択や移動の判断を行い、家畜の健康状態や群れの安定を把握してきた。また音は単に環境を知る手段であるだけでなく、呼び声や歌、沈黙といった実践を通じて動物や土地、さらには精霊的存在との関係を調整する役割を果たしている。本研究は、このような聴覚的世界に注目し、音を通じた関係形成の実践を民族誌的に記述することを目的とする。

モンゴルにおける音の研究は、20 世紀後半以降、主として民族音楽学、儀礼研究、人間・動物関係研究の三領域を中心に展開してきた。民族音楽学の研究では、ホーミーや長歌、馬頭琴などの伝統音楽の構造や演奏技法が詳細に分析されてきた。また儀礼研究では、シャーマニズムや仏教儀礼における音の役割が論じられてきた。さらに人間と動物の関係に関する研究では、牧畜社会における家畜管理や協働の技法が記述されてきた。しかし、これらの研究はいずれも音を特定の文脈に限定した分析にとどまり、遊牧民が日常生活の中でどのように音を聴き、解釈し、諸存在との関係を形成しているのかという生活世界の音実践には体系的には十分に踏み込んでこなかった。本研究は、こうした先行研究の成果を踏まえつつ、音を関係生成の技法として捉える分析視角を提示するものである。

本研究は、感覚人類学および音の人類学の議論を理論的背景としながら、音を表象ではなく実践として捉える視点を提示するものである。またマルチスピーシーズ人類学およびケア論の議論とも接続し、人間だけでなく家畜もまた音に応答する主体であることを民族誌的に示すことを目指した。

本研究の民族誌資料は、モンゴル国ドンドゴビ県ウルジット郡、ドゥブ県、セレグレン郡において実施したフィールドワークによって収集した。調査は複数回にわたり実施し、各回数週間から数か月わたって遊牧民家庭に滞在しながら参与観察を行った。調査では日常生活への参加を通じて音の実践を観察し、音響記録、映像記録、インタビューによる資料収集を行った。筆者は放牧、搾乳、家畜管理、競馬の準備などの日常的作業に参加しながら、音がどのように用いられているのかを観察した。

また筆者自身がモンゴル遊牧民の家庭で育った経験を持つことから、本研究ではオートエスノグラフィの手法も併用した。筆者は幼少期から馬や羊、山羊の管理、競馬の補助、搾乳などに携わってきたが、ラクダとの接触経験はこれまでほとんどなかった。そのため調査地におけるラクダ搾乳や歌の実践は新たな身体的経験でもあった。本研究では、このような慣れた身体と新たに学ぶ身体を往還する経験を通じて、音が関係生成に果たす役割を複数の感覚レベルから分析した。

第 I 章では先行研究を批判的に検討し、本研究の位置づけを明確にした。モンゴルの音研究はホ

ーミーや長歌、儀礼歌、馬頭琴などの音文化に焦点が当てられてきた一方で、風の読み取りや草の擦れる音、家畜の呼吸の変化、沈黙の立ち上がりといった日常的音の実践は体系的に扱われてこなかった。また、モンゴル遊牧民と動物との協働について研究した Fijn (2011) は動物誘導の技法として声掛けや身体動作を詳細に示したが、儀礼的音響や沈黙、精霊の応答、風の変化、音による関係回復といった領域は理論的中心としては十分に論じられてこなかった。本研究はこうした欠落を補い、音を通じた関係生成という視点から新たな民族誌的枠組みを提示する。

第Ⅱ章では調査地の自然環境、季節移動、放牧のリズム、気象の変化、現代化の影響などを示し、音が生活世界とどのように結びついているかを明らかにした。遊牧生活では気象条件や草地の状態が家畜管理に大きな影響を与えるため、音は環境の変化を察知する重要な手がかりとなる。本章では音が環境理解の基盤となる知覚実践として機能していることを示した。

第Ⅲ章ではホーミー、長歌、叙事詩、馬頭琴、労働歌・儀礼歌といった歴史的音文化を整理し、音が自然環境、移動生活、家畜との関係形成の中で発展してきたことを示した。これらの音文化は単なる芸能ではなく、遊牧生活のなかで形成された知覚様式や身体技法と深く結びついている。

第Ⅳ章では草原のサウンドスケープを分析し、風、草の摩擦音、雷、家畜の鳴き声、人間と動物の音、ゲル内部の生活音などが天候判断や放牧、危険察知といった日常的意思決定を支える実践知であることを明らかにした。音は単なる外的情報ではなく、環境との相互作用のなかで成立する知覚実践である。

第Ⅴ章ではモンゴル遊牧社会における馬のケアを音の視点から詳細に分析し、歌、声掛け、沈黙、身体接触が馬の情動や身体状態、そして人間との関係をどのように生成し調律するのかを明らかにした。本章の核心は、音が人と馬の関係における中心的な関係生成の技法であり、ケアの実践そのものを構成しているという点にある。

第Ⅵ章ではモンゴル競馬の文化的・儀礼的・身体的実践のなかで、ギンゴーや声掛け、沈黙、風や鳥や馬の動きといった音の要素がどのように場を構成し、人・馬・精霊を結びつけるかを民族誌的に明らかにした。本章では競馬が単なるスポーツではなく、音響的・儀礼的・霊的实践として理解されるべき複合的行為であることを示した。

第Ⅶ章は本論文の理論的中心となる章であり、音が人間・馬・土地・精霊のあいだに関係を立ち上げる過程を、オボー儀礼、ギンゴー、祈りの実践を中心に民族誌的に解明した。本章では、儀礼の場において風の響きや鳥や馬の動き、歌や祈りの声、沈黙の時間が重なり合うことで、人間と非人間的な存在が相互に応答する環境が形成されることを示した。オボー儀礼の場では、参加者は歌や祈りを捧げるだけでなく、沈黙や気配の変化にも注意を向けながら精霊の存在を感じ取る。こうした実践において音は単なる表現ではなく、人間と土地の主や祖先の霊との関係を更新する媒介として機能している。またギンゴーの歌は馬の情動や身体状態に働きかけると同時に、騎手や調教師の身体感覚を調整し、人と馬のあいだの呼吸やリズムを同期させる役割を果たしている。本章では音および沈黙が単なる感覚刺激ではなく、存在者同士が互いを知覚し交信する媒介として働くことを示した。音は固定した対象ではなく、人間・動物・土地・精霊が関係を結び直す過程のなかで生起する出来事であり、その都度関係が立ち上がる場を形成していることを明らかにした。

第Ⅷ章は比較民族誌の章であり、馬を中心に展開してきた音の分析をラクダという異なる種へと拡張することで、音を媒介としたケア実践の多様性と普遍性を明らかにした。本章では音が動物の身体や情動、記憶にどのように働きかけ、人間と家畜の関係を形成するのかを、馬とラクダの応答性の比較を通して検討した。馬の事例では、歌や呼び声、沈黙が人と馬の動きや意図を調整し、協働関係を成立させる技法として機能していた。調教や競馬の準備の過程では、人は声の調子やリズムを調整しながら馬に働きかけ、馬もまたそれに応答することで運動のリズムや緊張の状態が変化する。このような相互的な調整を通じて、人と馬のあいだには信頼関係が形成されていた。

一方、ラクダの事例では、死産した子ラクダを探して落ち着かない母ラクダに対し、牧民が歌を歌いながら搾乳することで緊張が緩和され、乳を分け与える関係が再構築されていた。牧民は歌を繰り返し歌いながらラクダに触れ、ゆっくりとした声のリズムによって母ラクダの呼吸や身体の緊

張を調整していた。このような歌の実践は母ラクダの情動を鎮めるだけでなく、子ラクダを失った後の関係を再び成立させるケアの技法として機能していた。

比較の結果、馬では音が動きや意図を調整する技法として働いていたのに対し、ラクダでは音が情動を鎮め関係を回復する技法として働いていたことが明らかになった。このように音は種によって異なる形で受け取られながらも、人と家畜の信頼や依存関係を支える重要な媒介となっていることを示した。

終章では各章で検討した実践を統合的に再検討し、歌やかけ声、沈黙、風、動物の鳴き声といった多層的な音が、人間・動物・土地・精霊のあいだに関係を生成する実践そのものであることを示した。音とは存在どうしが互いを知覚し応答し調律しあう出来事であり、その都度「場」を立ち上げる働きである。本研究は音を表象や文化的産物として理解する枠組みを越え、関係生成を駆動する実践として捉え直す理論的視座を提示した。この視点は感覚人類学、マルチスピーシーズ人類学、ケア論に対して音を通じた応答と調律という次元を理論的に位置づけ直すものである。モンゴル遊牧世界の民族誌的記述を通して、本研究は音を基盤とする関係論的存在理解の可能性を具体的に示した。

本研究の結果、モンゴル遊牧社会における音は単なる情報伝達や文化表現ではなく、人間・動物・土地・精霊のあいだに関係を生成する実践であることが明らかになった。牧民は風や動物の鳴き声、草の擦れる音などの環境の響きを聴き取りながら生活の判断を行うと同時に、歌や呼び声、沈黙を通じて動物や土地との関係を調整している。また本研究は、家畜が音に応答する主体であることを民族誌的に示した。馬やラクダは人間の声や歌に応答しながら身体の動きや情動の状態を変化させ、人間との協働関係を形成していた。音を通じた応答や調律は、人間と家畜のあいだの信頼関係を維持するための重要な技法となっていた。

さらに本研究は、音が人間だけでなく土地や精霊との関係を更新する媒介として理解されていることを明らかにした。オボー儀礼や祈りの場において歌や沈黙は精霊との交信を可能にし、人間と土地との結びつきを再確認する働きを持っていた。以上の結果から、本研究は音を表象や文化的産物として理解する従来の枠組みを越え、関係生成を駆動する実践として捉える視点を提示した。

参考文献

Fijn, N.

2011 *Living with Herds: Human-Animal Coexistence in Mongolia*. Cambridge: Cambridge University Press.